

2. どのようなときに熱中症を疑うか

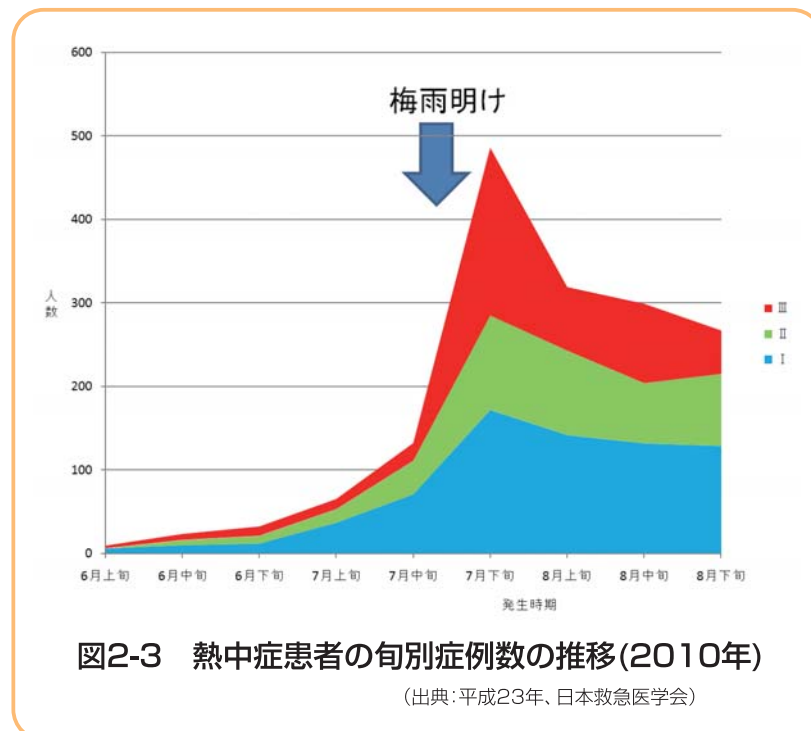
2. どのようなときに熱中症を疑うか

非常に暑い環境下であって、表2-1に示す症状があれば熱中症をすぐに疑うことができます。しかし、このような典型例ばかりが熱中症ではありません。まず、熱中症の発生は、梅雨の合間に突然気温が上昇した日や梅雨明けの蒸し暑い日など、身体が暑さに慣れていない時に起こりやすいということを念頭に置いておく必要があります。図2-3は2010年夏の例ですが、梅雨明け後の7月下旬から8月下旬まで、高温により多くの熱中症患者が発生しましたが、とくに、7月下旬の最初の熱波で、多くの重症患者が発生しました。

環境因子

- ・ 気温が高い、湿度が高い
- ・ 風が弱い、日差しが強い
- ・ 照り返しが強い、輻射熱*が強い
- ・ 急に暑くなった

※高温の炉や壁などからの放射によって伝わる熱



2. どういうときに熱中症を疑うか

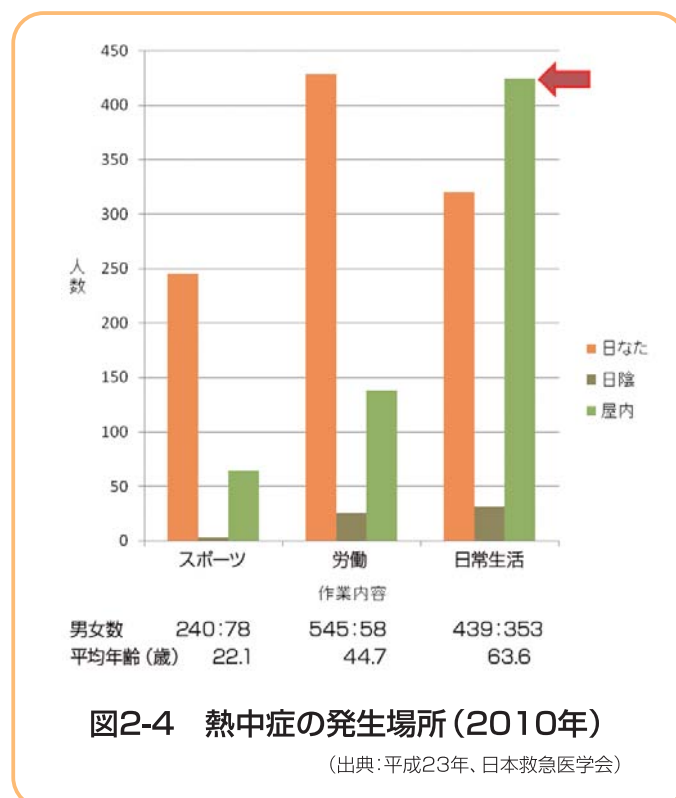
熱中症の危険信号として、次の症状が生じている場合には積極的に重症の熱中症を疑うべきでしょう。

熱中症の危険信号

- ・ 高い体温
- ・ 赤い・熱い・乾いた皮膚
(全く汗をかかない、触るととても熱い)
- ・ ズキンズキンとする頭痛
- ・ めまい、吐き気
- ・ 意識の障害
(応答が異常である、呼びかけに反応がないなど)

スポーツ時の熱中症の発生は若年層に多く、労働時では20歳代～50歳代で多く、主に炎天下で発生しています(図2-4、図2-5)。

日常生活では、散歩中、自転車乗車中、バス停でのバス待ちなどの屋外で発症するほか、室内での家事、飲酒、店番などでも発症しており、屋外より屋内での発症が多くなります。また、男性では10代～70代の幅広い年齢層で発症していますが、女性では10代(スポーツ)と70～80代(日常生活)で多くなります(図2-6)。



2. どのようなときに熱中症を疑うか

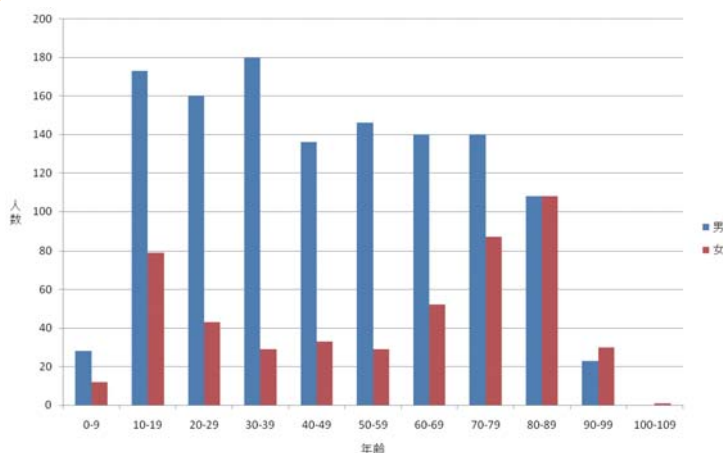


図2-5 熱中症の男女別年齢別症例数(2010年)

(出典:平成23年、日本救急医学会)

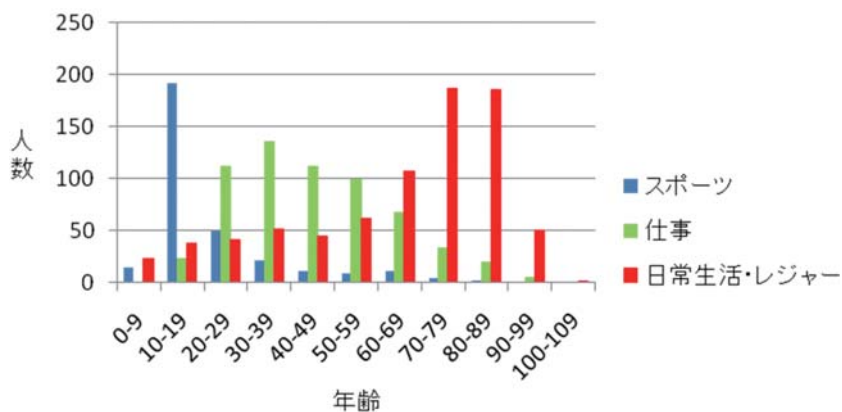


図2-6 年齢層図別の熱中症発生状況(2010年)

(出典:平成23年、日本救急医学会)